

## ミクロネシア・サタワル島における自然の文化化

## Cultural Construction of Nature on a Coral Reef Island of Satawal, Micronesia

秋道 智彌 国立民族学博物館・民族社会研究部 565-8511 吹田市千里万博公園10-1

Tomoya AKIMICHI Department of Social Anthropology, National Museum of  
Ethnology, Suita 565-8511, Japan

**ABSTRACT** The Satawalese (Central Caroline Islands, Micronesia) conceptualization on the nature is described with special reference to the division of time, folk-orientation, folk-taxonomy, and taboo observances. Sidereal, lunar, and celestial movements and natural phenomenon such as the wind direction, precipitation, riping of breadfruit, and fish run are combined together to make the time-reckoning and folk-orientation system of the island. Folk-taxonomy of marine life and the associated food observances as metaphors well reflect the maritime tradition of the people in which profound knowledge and marine lore are accumulated. Individual sets of these folk knowledge are examined as the hypothesized tripolar and circulation models. Land and sea are regarded as being opposed each other in terms of odour of the two areas but both regimes are neutral to the heavenly world. Odours related to human sex and female blood are also avoided by the supernatural beings controlling the land and the sea. These three domains figure a tripolar model of odour. *Pwuupw* has three meanings: triggerfish (Balistidae), the southern Cross (*Crux*) and the space allocation in the navigational knowledge of *Pwuupwunapanap*. The polysemic use of *pwuupw* suggests the integrated conception of nature as a circulation model between the sea and the heaven. The study of indigenous knowledge and cultural construction on the nature is also essential to an understanding about on-going degradation processes of the environment.

**Key words:** maritime adaptation / tripolar model / circulation model / cultural construction  
(海洋適応/三極モデル/循環モデル/文化的構築)

サンゴ礁の卓越する海洋世界における人びとの自然観 (ethno-natural history) について記述し、人類にとっての自然認識にかかわる普遍性とサンゴ礁世界における自然観の特徴点とを指摘することを大きな目的としている。まず自然観や自然認識を研究する視点と方法を概観する。つぎに、漁撈と航海術をつうじて海洋への適応を達成したオーストロネシア民族をとりあげる背景をのべる。本論では、その典型として筆者の調査にもとづくサタワル島 (ミクロネシア・中央カロリン諸島) の事例を報告する。

## 自然観へのアプローチ

### 自然観と現代

最初に、自然観の研究が現代世界においてはたす意義について若干ふれておきたい。伝統的、土着的な生活をおくってきた人びとの世界に外部から開発計画がもたらされ、周囲の環境や人びとの生活が大きくかわりつつある。人口増加、内乱、気候変化などにもなって外部から集団が流入・移住し、環境の変化に拍車をかけた。環境の急速な変化はとくに熱帯の途上国において顕著にみられる。急激な森林の伐採や海岸の埋め立て、道路の建設、プランテーション的な農業やアグロフォレストリーの浸透により、土着的な生活空間を特徴づけてきた景観は大きく変容しつつある。そして、自給的あるいは小規模な商品経済下にあった社会が巨大資本による経済システムに巻き込まれつつある。こうしたなかで、資源の乱開発を未然に防ぎ、持続的な利用と地域に根ざした開発と発展の必要性が叫ばれ、また具体的な計画が立案されつつある。これまで引き継がれてきた土着の資源利用法や環境への認識のしかたなどが、資源の持続的な利用や適正な管理方法につながるヒントや知恵を内に秘めていることが指摘されるようになった。こうした状況で、自然観の研究をおこなうことは、きわめて重大な意義をもつものであろう。とくに開発や発展を指向する側からみると、従来から引きつがれてきた自然への認識のありかたは、近代的、科学的なモノの見方とは一線を画する場合がおおい。しかも、一見、非合理的な説明や論理が介在することがあり、近代の側からは却下されがちである。このようなあやまった考えを是正する意味でも、土着的な自然観について詳細な資料と情報を提示することは必要不可欠な作業である。

### 民族自然誌—象徴から生業まで

自然観は、自然への知識や認識体系、観念を総体としてあらわしたものである。なにをもって自然観とみなすかは考えかたによって異なる。神話や儀礼などのデータを核として、そのなかでの象徴的な側面をあつかう立場がいっぽうの極にあるだろう。他方では、自然とのかかわりあいとなる生業活動や物質文化、自然の分類や知識など、日常的な知識や行為のなかで展開される自然への認識や観念について総合的に分析する立場がある。両者を比較するとわかるように、自然観とはこのようなものであるとする前提は異なる。しかし、自然がいかに文化のなかで組み立てられるのかが (cultural construction) (Ellen, 1996; Ingold, 1996) 自然観の分析であるとすれば、自然を文化に取り込む人間のいとなみは象徴から生業にいたるまで多面化してみられるのは当然と考えねばならない。この点で、自然観の研究は、人間と自然との相対的なかかわりとその歴史を集団ごと、あるいは集団間で比較する民族自然史 (誌) 的研究に統合される (今森ほか, 1998)。

自然観は具体的な知識や規範、図像や物質、あるいは神話や儀礼として表象化される (秋道, 1988a)。たとえば自然観の研究で、連続的な自然がどのように区分され、分節化されるかを分析する民族分類の方法が有効である (Tylor, 1969)。しかし、分類だけが必要かつ十分であるわけではけっしてない。日常的な場面や生活の局面での知識の活用 (嘉田, 1995; 松井, 1997)、儀礼や神話に見え隠れする人びとの自然にたいする態度や観念 (Turner, 1969)、災害や危機における自然への畏敬や対応 (石森, 1985)、政治と紛争 (栗本, 1994) なども自然観を構成する重要な要素とおもわれる。以上の点から、さまざまな位相における知識を抽出し記述することが妥当な方法とみなしうる。

### 伝統的な生態知とその変容

伝統的な生態知 (traditional ecological knowledge) と科学的な生態知 (scientific ecological

knowledge) は、たがいに相反する性格のものではない。一般的にいうと、両者はたがいに重複する2つの円としてあらわされる関係にある。しかし、伝統的な知識のうえに科学的な知識もたらされたり、ぎゃくに科学的な知識のうえに土着の知識が影響をあたえるような単純なモデルは現実的には想定しにくい。伝統的な知識といえども不断に外界からの影響にさらされており、伝統と近代は相互に影響をあたえあっている (Thomas, 1991)。この議論は、狩猟採集民について現在おこなわれている本質主義と修正主義の論争にも連動する (Headland, 1997)。

### 漁労と航海術にみる自然認識

本稿でサンゴ礁世界における自然観をとりあげる意義と調査地の選定理由について述べておく。オセアニア地域に着目するとわかるように、海を越えた人類の移動は数万年前にさかのぼる。オーストラリア大陸やソロモン諸島における旧石器時代の遺物の存在から、4万年前あるいはそれ以前に海を越えた移動がおこなわれたことは確実である (Bellwood, n.d.)。しかし、東南アジアから海洋世界への飛躍的な海洋適応と植民が開始されたのは、紀元前二千年期以来のことである。その担い手はオーストロネシア民族である (Blust, 1988, Irwin, 1992)。オーストロネシア民族の人びとは、その移動過程で海洋へのさまざまな技術的・身体的な適応を果たした。その結果、太平洋側ではハワイ、イースター島、ニュージーランド、インド洋側ではマダガスカル島までその居住圏を拡大した。海洋世界をふくむとはいえ、地球上でもっともひろい範囲にわたって拡散したのがほかならぬオーストロネシア民族である。

オーストロネシア民族の海洋環境への適応を特徴づける要素は、海洋における漁労・採集と島嶼間の移動と拡散を可能にした航海術 (および船の建造技術) である (Irwin, 1998)。人びとが拡散した領域は南北の両回帰線によってはさまれる熱帯・亜熱帯の低緯度帯に属し、島嶼の多くはサンゴ礁海域にふくまれる。サンゴ礁海域における集団の生存にとって重要な生業は、海における漁労・採集と、陸上におけるタロイモ、ヤマイモなどの根栽作物やパンノキ、パンダナス、ココヤシなどの樹木作物の栽培である (Barrau, 1958; 1961)。しかも島嶼での生活は、かならずしも外界と隔絶されていたのではない。島嶼間の交易や遠征・戦闘、さらには移動・移住が頻繁におこなわれた。船と航海術はそのために不可欠の手段・技術であった。以上の点で、漁労と航海術にかかわる知識や活動の分析から、サンゴ礁世界における人間と自然とのかかわりあいをさぐる試みは的を得たものといえるだろう。

ミクロネシアの中央カロリン諸島は、低平な隆起サンゴ礁と環礁からなる。一部の島嶼間では現在でもさかんに全長 8-10 m の大型帆走カヌーによる遠洋航海がおこなわれている。ミクロネシアの航海術は、星、太陽、月、波、風などの天体・海洋現象や海鳥や魚などの生物現象をたくみに利用しておこなわれる (Goodenough, 1953; Gladwin, 1970; Lewis, 1975; Riesenberg, 1976; 秋道, 1981b, 1986, 1988b)。

中央カロリン諸島のサンゴ礁島では、島の周囲はサンゴ礁によってかこまれている。リーフを境として島側の浅瀬 (礁原や礁湖) と外側の深み (礁前面)、さらに外洋を利用したさまざまな種類の漁労活動がおこなわれている (Alkire, 1978; Akimichi, 1986)。

以上の点からサタウル島の事例は適切であり詳細に検討する価値があるといえる。漁労と航海の知識から自然観を分析する手だてとして、とくに (1) 時間認識、(2) 方位認識、(3) 海洋生物の民俗分類、(4) 食物禁忌、の4点を取りあげてオセアニアにおけるサンゴ礁世界における住民のもつ自然観の特徴を指摘したい。

### 調査地

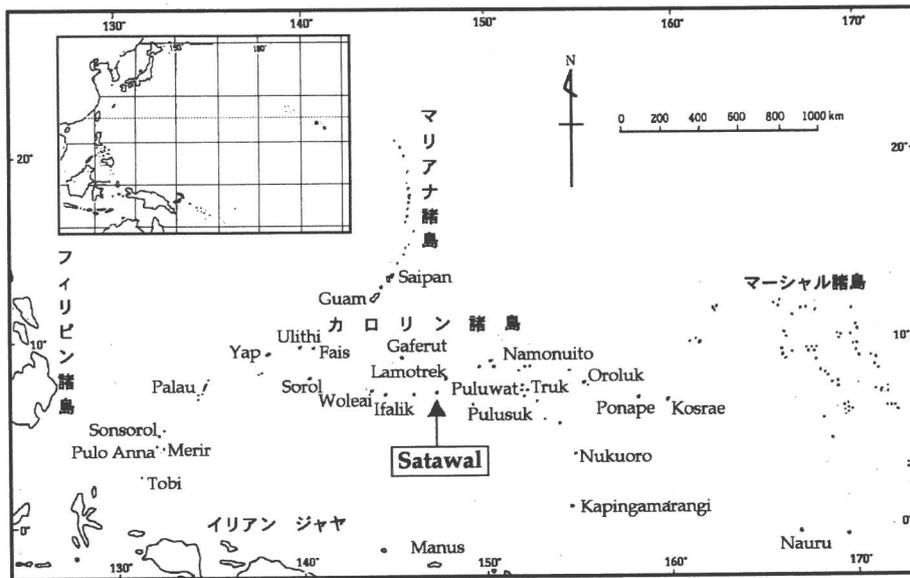


図1. カロリン諸島

調査をおこなったサタワル島は、ミクロネシアの中央カロリン諸島に位置する隆起サンゴ礁島である（北緯7度21分，東経147度2分）（図1）。島は周囲6km ならずであり，ほぼ長楕円形をしており北東-南西軸がもっとも長い。島は低平で，内陸中央部はバンノキ林とタロイモ畑からなる（Fosberg, 1969）。海岸・内陸部ともにココヤシがひろくみられる。集落は島の西海岸に集中する。島の外延は裾礁でかこまれ，北東端からやや大きなサンゴ礁が発達している。サタワル島民の利用する資源領域は島とその周囲だけではない。島の南方十数kmにあるWenikiy礁，島の北方約100km 周囲に位置する無人島（West Fayu, Pikelot）やサンゴ礁（Yayuta, Faini Karangaap, Woranipar, Wonipik）である。これらの島じまやサンゴ礁では，カツオ・マグロのお釣り・引き釣り，アオウミガメとその卵の採捕，シャコガイ（ヒレジャコガイ），サンゴ礁魚類の突き漁，釣り漁などがおこなわれる。サタワル島の調査から，名称として区別されている漁法は釣り，網，うけなどをふくめ全部で35であった（Akimichi, 1986）。また魚の方名を全部で約450 採集することができた（Akimichi and Sauchomal, 1982）。

筆者は1979年5月から1980年3月にかけて，石森秀三，須藤健一と共同調査を同島で実施した。とくに筆者はサタワル島における民族魚類学的な分析や資源利用，さらには航海術に関する調査をおこない，それらに関する研究結果は一連の論稿として公表してきた（秋道，1980, 1981a, 1981b, 1981c, 1984a, 1984b, 1986, 1988b, 1989a, 1989b; Akimichi, 1986, 1987, 1996）。本稿は既発表の諸論文に依拠する面がすくなからずあるが，サタワル島における自然観を全体として考察する試みは今回が最初である。

## 結果

### 時間認識

連続的に推移する時間がどのように区分されるのかを，言語的な分類概念によって検討した。サ

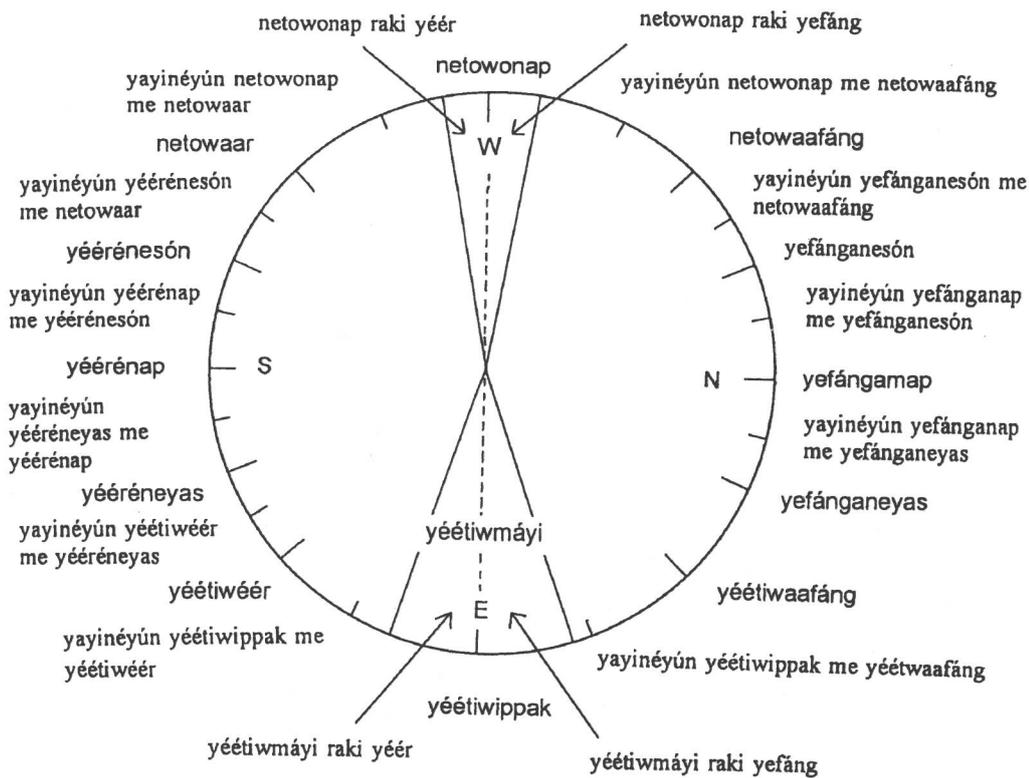


図2. 風に関する名称。(秋道 1980 "嵐の星" と自然認識より)

タウル島は貿易風帯にあり、1年(rak)は *neefáng* (北の意味) と *neerák* (1年の意味) に2区分される。これは風向きや降水量の変化、食料資源の変動など、自然現象の変化をもとにした区分であり、自然暦といえる。また1年の季節については、特定の星や星座の出現をもとにした星座暦による区分がいられていた。サタウル島では1年は12の月に区分される。これは太陰暦による1年の区分とは類似しているがまったく異なる星座月であり、月の名称は特定の星や星座の名称になっている。現にカロリン諸島では、9から14の星座月が存在することが知られている (Goodenough, 1953)。日周期は夜と昼の繰り返しによって認識されているが、その名称は1から30までである。これはあきらかに月の満ち欠けを元にした太陰暦による区分である。ただし星座の出没をもとにした12の月の一般名称は *mereman* であり、これは天体である月 (moon) を意味する *meram* から派生したことばである (秋道, 1994)。

中央カロリン諸島一帯では、星や星座が出没するさいに嵐が到来するという内容の知識がいられている (秋道, 1980)。サタウル島の例では、21種類の「嵐の星」が1年の特定時期、夜明け直前に水平線に出現したりあるいは没入するさいに嵐が発生すると見なされている。暦の問題としてみれば、星座の出没をきっかけとする前述の星座暦の土台となっている。そして、嵐の到来にともなう風向き、降水量、天候などの自然現象の変化や魚の来遊、ウミガメの産卵期、パンノキの成熟など資源の変動が重要な関心事になっている。つまり星座暦と自然暦の組合せが「嵐の星」の知識内容であるといえる。

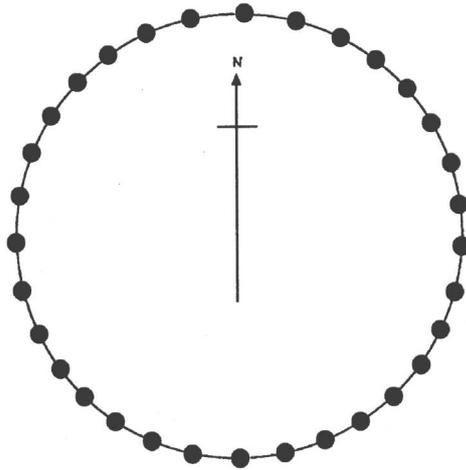


図3. 星座コンパス. それぞれの方位の間は等間隔になっているが、実際のコンパス方位はかならずしもこの方位と一致しない。一致するのは、北極星のしめす真北と南十字星座の南中時の真南だけである。

また北緯7度の低緯度帯にあるサタワル島では、明確な形ではないものの太陽の出現する位置が季節的に変動することが認識されている。すなわち、太陽は *táán mwaarikar* (北東寄り) と *táái sarepwen* (南東寄り) という名称の方位のあいだで位置が季節的に移動するとされている。内容が体系立っていないのか筆者の情報不足によるのかそれ以上の詳細は不明であったが、太陽暦に準じる内容の知識も一部存在することがあきらかである。以上のように、1年、季節、月などの時間認識が、太陽暦、太陰暦、星座暦、自然暦をたくみに組合せた形でなされていることがあきらかになった。とくに星と星座を利用して季節や時間を認識する知識がミクロネシア地域における大きな特徴といえる。

### 方位認識

方位の認識に関連して、いくつもの方位名称が存在する。東西南北に対応するのが東 (*yeetiw*)、西 (*netow*)、南 (*yéér*)、北 (*yefáng*) である。北東、北西、南東、南西は基本的に東西南北の方位名称の組合せからなる。たとえば、南東は *yéétiweer*、北西は *netowaafáng* である。興味があることに、さらに細かい方位について方位とは異なる名称の体系が用いられることがわかった。結果として、全部で28の名称が存在することが判明した (図2)。その特徴は東西軸と南北軸とでは名称が対称形ではないこと、平面上でありながら「東寄り」が上 (*neyas*) を、西寄りが下 (*nesón*) をあらわす空間認識がなされていること、東の方位にたいして特徴的な方位名称が存在 (*yéétimáyi*) すること、中間的な方位をしめすさいに *yayinéyun* (・・・の間), *raki* (・・・寄り) という名称が用いられている諸点である。*yeetimáyi* は、東をあらわす *yeetiw* と向かい風に抗して帆走カヌーを風上にすすめる *yámmáyi* 航法 (タッキングに類似する) の用語を組合せたものである。つまり、これらの風の名称群は、東から北東寄りの貿易風が年間の半分以上のあいだ卓越する北半球の低緯度帯における航海術の知識と密接に結びついたものであることをしめしている。

サタワル島の航海術においては、目的とする島の方位や航海の指針として基本的に重要な方位認識のための方位盤がしられている。私はこれを星座コンパスとよぶことにしている。星座コン

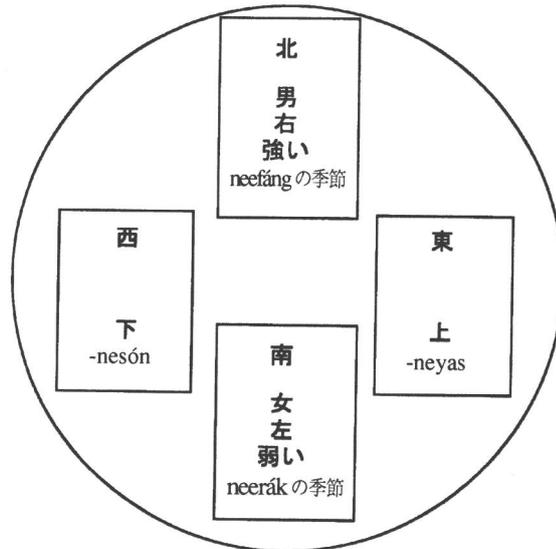


図4. 嵐の星による空間認識と象徴体系.

パスは、円周上に32の方位を等間隔に配列したものであり（秋道，1981b）（図3），特定の星や星座の水平線に出没する方位にもとづいている。星や星座には、北極星，南十字座，わし座（ $\alpha$ ， $\beta$ ， $\gamma$ ），こと座，さそり座，オリオン座，からす座，こぐま座（ $\beta$ ），おおくま座（ $\alpha$ ），カシオペア座（ $\alpha$ ），おうし座がもちいられる。それぞれの方位は等間隔に配列されているが，星が実際に出現する方位はモデル上の位置とはかならずしも一致しない。一致するのは，北極星のさす真北と，南十字座が南中する真南だけである。しかしながら，星座コンパスは記憶装置としてあるいは知識体系としてみると整合性のある方位モデルであることはまちがいない。星座コンパスのあらわす方位の誤差はそれぞれ十数度内外であり，実際の航海にさいしてもかなり精度の高いことが指摘されている（松木，1982）。

これと関連して，サタウル島のある航海者は，伝統的な知識がかならずしも実際の航海のさいに整合しない点に注目し，より正確な方位を把握するための知識を編み出した。これは32方位をさらにこまかく分割するために，「・・・の間」をあらわす *neemach*，あるいは *mach* という用語をもちいて方位をあらわすものである。たとえば，隣接する方位 P と方位 Q との間方位 R は，*neemachni P me Q*，R と P との間方位 S は，*nemacchen P me nemach* と称される。この方法によって 32 の方位は，さらに 64，128，256 と細分されることになる。しかし言語的に細分化が可能であるとしても，記憶・学習するうえでこの区分法が有効であるのか，さらに実際の航海のさいにどれだけ有用であるのかは問題視しなければならない。すくなくとも，言語を媒介とした知識によって方位を認識することと，実際の海上において方位を認識することとはおなじことを意味するとはかぎらない。

「嵐の星」に関連した方位・空間認識について指摘しておきたいのは，嵐の生起する方位から割り出される独特の考えかたである。1年のなかでつぎつぎと生起する嵐は，特定の嵐の星が出没する方位と無関係におこるのではない。すなわち嵐の星の位置する方位から風が吹くと見なされている。しかも先述したように，サタウル島では1年は *neerák* と *neefáng* に二大区分されるな

かで、「*neerák* の星は強くない、*neerák* の嵐は強くない」、*neefáng* の星は強い、*neefáng* の嵐は強い」と表現される。前述した星座コンパスの図3上でいうと、東西線をはさんだ北側の星は *fiúún peyikimwáán* (男側の星)、南側の星は *fiúún peyikirhóópwut* (女側の星) とよばれる。中央カロリン諸島では、男が右を、女が左を象徴的にしめす観念が発達している。さらに、風の説明で述べたように、東が上、西が下をあらわす。これらの点を組合せて考えると、空間と方位に関して図4にしめしたような二項対立の組合せを特徴として指摘することができる。

### 民俗分類

サタワル島民による民俗分類について、筆者はすでに報告をおこなっている (秋道, 1981a)。ここではとくにその特徴となる点を指摘しておくにとどめる。まず *maan* とよばれる概念について注目しておきたい。サタワル島では *maan* という概念が多義的に用いられる。すなわち *maan* には、(1) 動物と人間の総称、(2) 人間をのぞく動物全体、(3) 鳥類、(4) 虫類、(5) 微生物、(6) 異常な状態にある人間、の6つの多様な意味がある。異常な状態にある人間のなかには、乳幼児、妊婦、病人、深く潜水できる人、木から落ちた人などがふくまれる。

動物をあらわす *maan* のなかに、魚や海の動物を総称する *yiik* という下位概念がふくまれる。*yiik* は硬骨魚類だけでなく、サメやエイなどの軟骨魚類をふくむ。*yiik* はさらにクジラやイルカなどの海生哺乳類やウミガメ、ウミヘビなどの爬虫類をふくんでいる。*yiik* の下位には、チョウチヨウウオ、ベラ、ダツ、トビウオ、マグロなど、それぞれ異なった種類の魚のグループに対応する名称群が存在する。たとえば、ハタは一般にアニ (*yániy*)、トビウオの仲間はマガル (*mengar*)、タカサゴの仲間はティーン (*tiin*) とそれぞれよばれる。さらにそれぞれの仲間には、個別の名称をもつ魚名がふくまれる。それぞれの名称は、たいいていの場合、生物学的な種 (*species*) に対応する。しかしなかには、オスとメスとで名称が異なっている場合や、いくつかの種を包括した名称が存在するだけで種ごとの名称に細分化されていない場合もある。前者の例では、クギベラ *Gomphosus varius* のオス個体は *yasáápin yariné*、メス個体は *yasááp pwerepwer* とよばれる。*yasááp* は両者の包括名称であり、*yariné* はハコベラ *Thalassoma quiquevitta* を、*pwerepwer* は「白い」ことをさす (Akimichi & Sauchomal, 1982)。類似の例は、ミツボシキウセン *Halichoeres trimaculatus* やナガブダイ *Scarops rubroviolatus*、その他のブダイの仲間でもしられている。

### 食物禁忌

サタワル島では、日常・非日常的な場で利用されるさまざまな食物に関する規制や禁忌が知られている。なかでも海の魚や貝については多様な食物規制の慣行があった。この問題について、私は民族魚類学の研究として報告したことがある (秋道, 1981a)。魚の種類におうじてさまざまな事例が存在するが、ここでは本稿の内容に即してモンガラカワハギの事例をとりあげてみたい。

モンガラカワハギは、島の人びとにとって日常の食料として利用される。ふつうは、直接、直火で焼いて皮をむいて食べる。鍋に入れて塩水や真水で煮たり、石蒸し焼き料理にされることもある。観察では、皮が固いので直火焼きにして食べられている場合がおおいことを確認している。ただし、特定の地位や状況にある人間はこの魚を食べることができない。たとえば、妊婦はモンガラカワハギを食べることが禁止される。この魚だけでなく、タコ、ウニなども食べることが禁止される。これらはおもに女性が島の裾礁域で採集する生物である。禁忌の対象となる魚は一般にイキ・ピン (*yikipin*) とよばれる。妊婦が食べることができない訳は、人びとによると、もしこれらの魚を食べると難産になるからであるという。この禁忌の説明として、モンガラカワハギ、

タコ、ウニなどはサンゴ礁の岩穴に潜んでおり、人間が引き出そうとしてもなかなか取り出すことができない。このような性質をもっている魚や生き物を食べると、その属性が食べた人間にも影響をあたえ、その結果、妊婦は難産になるとみなされる(秋道, 1981a)。妊婦に適用される魚の禁忌は *pininmanuwuupw* と称される。*pinin* の *pin* は「禁止された」、*manuwuupw* の *man* は「動物」、*wuupw* は「腹」の意味である。

モンガラカワハギは、妊婦とともに月経中の女性は食べることができないとされている。妊婦や月経中の女性は、通常的生活空間にとどまることはできない。*yimwenikat* とよばれる家(通常は産屋ないし月経小屋とよばれる)にとどまらなければならない。モンガラカワハギとともに禁忌の対象とされるのは、カツオ、マグロ、メアジ、タカサゴ、ヒメジ、イスズミ、タコである。その理由を島民にきいてみると、これらの魚はいずれも流木や流木漁に関連した魚である。もしこれらの魚を妊婦や月経中の女性が食べると、島に魚の資源がもたらされないと見なされていた。

モンガラカワハギは、流木を島によびよせる儀礼をおこなう特別の能力をもった *sówuyápeyipey* とよばれる個人の禁忌魚でもある。*sówuyápeyipey* が食べることを禁じられる魚のなかには、モンガラカワハギ以外にヒラアジ、イスズミ、ツムブリ、タカサゴ、ヒメジ、アジ、ツバメウオの幼魚、カンパチの幼魚、カツオ、マグロなどである。もし *sówuyápeyipey* が上記の魚を食べると、島に流木がもたらされないとみなされている。流木漁のさい、流木についてくる魚のうちいくつかの種類は日常とは異なった名称でよぶ必要があった。たとえば、モンガラカワハギは *pwuupw* ではなく *suunga*、イスズミは *réén* ではなく *parerhon*、カツオ *yarángaap* やマグロ *tókuw* は *yaas*、サメは *pááw* ではなく *mayinap* とそれぞれよばなければならなかった(秋道, 1984b)。しかも流木にとまらなう以上の魚は、総称して通常の *yik* という名称ではなく *yikéén* とよばなければならなかった。以上のように、魚としての *pwuupw* にはいくつもの種類が区別されていること、流木につく *pwuupw* にたいして独特の観念が発達し、流木が人びとの生活にとってたいへん重要であることがわかる。

妊婦や月経中の女性と流木をよぶ儀礼をおこなう人が、ともにモンガラカワハギをはじめいくつかの魚を食べることができない点に注意を要する。おもな種類の魚が禁忌の対象とされている点は、妊婦・月経中の女性と儀礼執行者のあいだではおなじである。しかも、それらの魚を食べると島に資源や流木がもたらされないと見なされている点でもおなじである。ただし、妊婦や月経中の女性が食べてはいけない理由と、儀礼をおこなう人間が食べてはいけない理由はおなじと考えられているのではない。

結論的にいうと、流木の資源をもたらしのは海の資源を人間にもたらし海を超自然的な存在であり、人間のしかも女性の血の匂いを忌避すると考えられている。通常の人間よりも特殊な能力をもった *sówuyápeyipey* は禁忌を遵守することによって島に資源がもたらされることが保証される。妊婦や月経中の女性にしる儀礼執行者にしる、個人の禁忌を遵守することによって集団の危機、すなわち資源の枯渇から島を救うことになる。以上のように食物禁忌の分析から、自然や資源にたいするサタウル島民の観念や考え方の一端があきらかになる。

## 考 察

時間認識、方位認識、民俗分類、食物禁忌の4項目についてサタウル島における自然観の多様な側面について記述した。これらは個別的な知識、あるいは自然認識の側面を示すものであるが、全体としてどのような関係性あるいは連関性 (linkage/associations) をみいだすことができるか

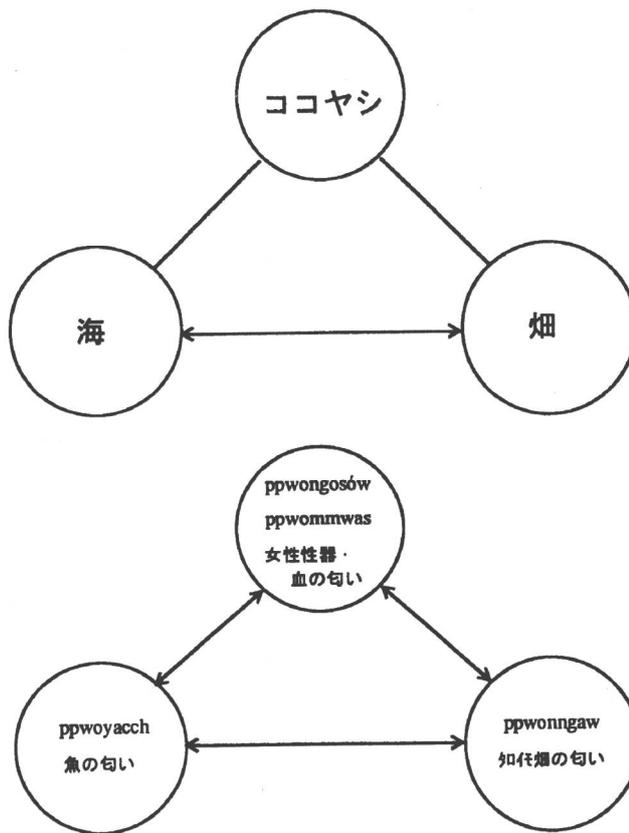


図5. サタワル島における自然観をしめす三極構造. 上図では、天の超自然的存在である *Nuukaináng* と、海の超自然的存在 *yanú sáát*, 畑と森の超自然的存在である *yanú yinótopwén* が配置されている。下図では、匂いを媒介として。人間世界と超自然界の対立、魚の匂いとタロイモ畑の匂いの対立が模式的にしめされている。

ろうか。もとより個別の知識の総和が自然観を構成するといえても、その内的な構造はあきらかにされていない。以下、この点に注目して考察をおこなう。

#### 自然観の三極構造モデル

前節でみたように、女性の血の匂いを海の超自然的な存在が嫌悪するという観念がみられた。この件に関連して、魚を食べたあとにタロイモ畑やパンノキの生育している森にいたり、魚やウミガメの肉をタロイモ畑に持参すると、島のタロイモやパンノキが枯れたり、実がならないとみなされている。また前日に性交をおこなった人（男女とも）、妊婦や月経中の女性も畑や森に行くことができない。もしいけば、その人の太股が腫れる病気になるとみなされている。いっぽう、男性が海に漁に行く場合、パンノキやタロイモなどの食物を持参することはできない。もしタロイモやパンノキの実をもっていくと、海の資源がなくなるとみなされる。また男性が前夜に性交渉をもった場合も、タブーを破るとその男性の太股が腫れる病気になると見なされる。

以上の禁忌にたいして、匂いをキーワードにサタワル島民の自然にたいする考えかたをしるこ

とができる。まず海の超自然的存在は、パンノキやタロイモなどの匂いを忌避する。しかも女性の血の匂いや性器の匂いをきらう。同様なことは、畑や森についてもあてはまる。すなわち森の超自然的な存在は、魚やウミガメの匂いを忌避し、しかも人間の血や性器の匂いをきらう。海の超自然的な存在は *yanú saát*、森の超自然的な存在は *yanú yinótopwen* とよばれる。*yanú* は「超自然的な存在」、*saát* は「海」、*pwén* は「畑」をそれぞれしめす。*yanú saát* は男性、*yanú yinótopwen* は女性である。両者ともに、性器に代表される人間の匂いととも、たがいの領域に固有の匂いをきらう。

人間が海や畑にいくさいに、厳格な禁忌が適用されることが以上の点から明らかになる。同時に、海や畑から人びとが日常世界である村にもどるさいに、それぞれ海の匂いや畑の匂いを水浴によってきれいにしておさなければならなかった。すなわち、超自然の支配する空間の匂いを人間のいる世界に持ち込むことも禁止されたのである。こうした点で、海の超自然的存在、森の超自然的な存在、そして人間は匂いという点で、あるいは空間的な配置においてもたがいに対立する三極構造の関係にあるとみなすことができる(図5)。

さらに興味があるのはココヤシの存在である。畑や森にいく場合、魚やウミガメは禁止されるがココヤシは自由に持参してもよかった。同様に海にいく場合にも、ココヤシを持っていてもよいとされている。ココヤシが魚やパンノキと異なるのは、「匂いがない」という特徴があることによる。そしてココヤシは天の超自然的な存在である *Nuukaináng* の食物であり、「匂いがない」とみなされている。*náng* は「天」をあらわす。ココヤシに匂いがないことと海や畑の超自然的な存在が忌避しないことは整合する。天、畑、海の超自然的な存在はたがいに異なった領域を支配するわけである。

禁忌の侵害がどのような影響をあたえるかについてふれておく。性交渉に関連したタブーでは、個人の太腿部に病気が発生する。月経や妊婦の場合、あるいは食物に関連した場合や、儀礼執行者が禁忌を侵害した場合も、海や畑の資源が枯渇するとみなされている。儀礼執行者は通常の人間よりも超自然的存在にちかい位置にある。一方、妊婦や月経時の女性は前述したように、通常の人間ではなく動物をしめす *maan* という範疇に属する。通常の人間が性的な禁忌を破ったときだけ身体的な病気になり、それ以外の場合はすべて島の資源が枯渇するとされていることになる。超自然的な存在が関与するとはいえ、島の資源の変動にたいする島民の自然観がこの点に凝縮しているといっても過言ではない。

### 民俗分類の多義性

サタウル島の民俗分類を全体としてみると、世界各地の民俗分類においてよくみられるように、*maan* (生物)、*maan* (動物)、*yiik* (魚) といくつかの分類段階があり、末端の段階では属、種あるいは雌雄の性別個体が対応する構造になっている。*maan* にいくつかの意味が付与されていることは前述したが、以下にのべる *pwuupw* は *maan* における多義性や、Frake (1969) がフィリピンのスバヌン族における *bunga* というカテゴリーをめぐってしめした事例 (Frake, 1970) とはその内容が異なっている。

*pwuupw* というサタウル語には、いくつかの意味がある。第1は魚である「モンガラカワハギの仲間」、第2は「南十字星」(Crux)、そして第3は航海術の知識としての「*Pwuupwunapanap*」である。

モンガラカワハギは一般に *pwuupw* とよばれる。*pwuupw* という名称で一括されるのは、モンガラカワハギ科に属する魚 (Balistidae) である。このなかには、14 の異なった名称が存在する (Akimichi & Sauchomal, 1982)。14 のうち 11 例の名称における接頭辞は *pwu-* であり、*pwuupw*

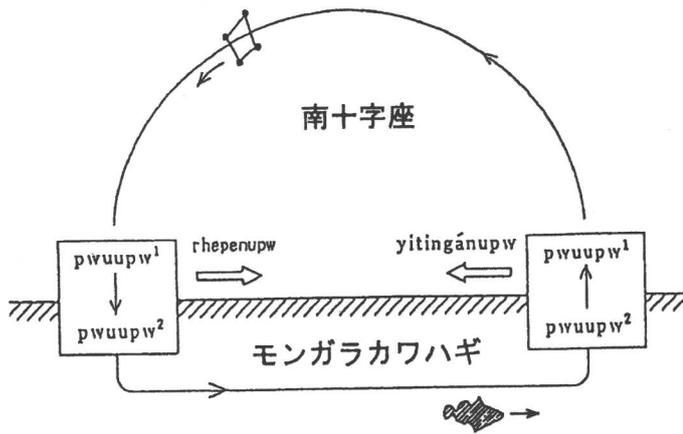


図6. 天界と水界を循環する *pwuupw* のモデル。*pwuupw*<sup>1</sup>は南十字星を、*pwuupw*<sup>2</sup>は魚のモンガラカワハギをあらわす。*pwuupw*<sup>2</sup>が*pwuupw*<sup>1</sup>に、*pwuupw*<sup>1</sup>が*pwuupw*<sup>2</sup>に変換するさいに嵐が生じる。

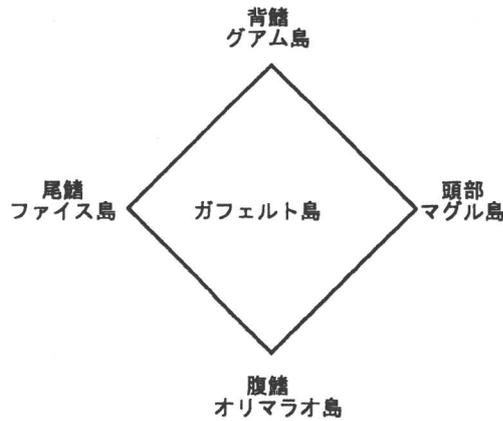


図7. *Pwuupwunapapap* をあらわす模式図。巨大な魚の部位が5つの島に対応している。中には、架空の島やサンゴ礁があてはめられることもある。

の仲間であることが容易にわかる。また *pwuupwan yápeipey* は、「流木のプープ」という意味をあらわし、外洋で浮遊している流木についてみいだされる。流木が島に接岸することは島民にとってたいへん重要な意味をもつことはすでにふれたとおりである。

*pwuupw* の第2番目の意味は「南十字星」である。*pwuupw* がもともと星としてか魚としての名称であるのかはあきらかではないが、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\delta$ の4つの星からなる南十字座は、すくなくともその形が魚のモンガラカワハギに類似していることがわかる。

天体としての南十字星と海中の存在であるモンガラカワハギが名称のうえでは一致しているが、それ以上に星と魚がたがいに交換するとみなされていることを示唆する知識が存在する。それが

先述した「嵐の星」とよばれる航海術の知識である(秋道, 1980)。この知識では、「水中の」南十字星が水平線にあらわれるときに強い風が吹くと見なされる。その嵐の名前は *yitingánupw* である。また、天空にある南十字星が水中に没するさいに嵐が生じるという。その嵐の名前は *rhepenupw* であり、その意味は「モンガラカワハギの尾を蹴る」という意味である。すなわち、風や嵐が生起するのはちょうど魚が水面に現れたり、尾を蹴るようにして水中に没する様子を水面の波立ちとみなすアナロジーが用いられている。このことから、水中の魚であるモンガラカワハギが水面にあらわれて天空を移動するあいだは南十字星となり、ふたたび水中に没して魚になるとみなされていると考えられる *pwuupw* は天界と水界を循環するものと見なすことができる(図6)。このことから、*pwuupw* が星と魚をあらわすことの意味がよく理解できる。注目すべきことは、海中に潜ったモンガラカワハギは、流木にもなつて島にもたらされることである。そのために、流木を島によびよせる儀礼がおこなわれる。魚と星の循環モデルに、人間のおこなう儀礼が関与することによって、自然が文化化されるのである。

*pwuupw* の3番目の意味は、空間的な認識と関連するものとして利用される場合である。それが *Pwuupwunapanap* とよばれる航海術の知識である(Riesenberg, 1976; Alkire, 1980; 秋道, 1981c; Akimichi, 1987)。*Pwuupwunapanap* では、海面上に巨大なモンガラカワハギが浮かんでいるというイメージが前提とされる。そしてこの巨大な魚の頭部、背鰭、腹鰭、尾鰭、からだの中央部にそれぞれ島やサンゴ礁が位置するという知識内容がくわえられる。たとえば、図7にあるように、頭部にはマグル島、体の中央部がガフェルト島、尾鰭がファイブ島、背鰭がグナム島、腹鰭がオリマラオ島に相当するという内容の *Pwuupwunapanap* がある。ただしこのような島嶼関係をダイヤモンド形上に配置したものは実際の海図上にあらわされた関係をしめすというよりも、あくまで概念的なものといえる。実際の海図と比較すれば、この点は一目瞭然である。しかも、この知識はすべて実在する島やサンゴ礁だけが魚の各部に位置するとする内容のものではかならずしもない。というのは、魚の各部には架空の存在が指定されている。すべてが架空というのではなく、魚の一部が実在する島やサンゴ礁になっている点がポイントである。すなわち、*Pwuupwunapanap* の知識は航海術における島嶼間の地理的な位置関係をしめしたものであるが、実在と架空が混然一体となっている。このことから、この知識が秘儀的で實際上、役に立たないものであると結論できるだろうか。私は周囲に島陰をみることができないう外洋での航海のさいに、いったい頭のなかで実在と架空を峻別することにどのくらいの意味があるのだろうかと考える。むしろ、実在物と架空の存在が同居することを当たり前とみなす発想こそが重要な認識のあり方ではないかと考える。

### 自然の文化化と自然観

モンガラカワハギの事例にあるように、天界と水界とのあいだで魚と星が循環する内容は、自然物の変換(= transformation)に関する自然への思考方法をしめすものである。すなわち、熱帯・亜熱帯にふつうにみられるモンガラカワハギという魚と低緯度帯でこれもふつうにみられる南十字座が島嶼世界では、海と空との間で変換すると位置づけられている。これが熱帯の低緯度地域に特有の自然認識のしかたであるといえるだろう。それと同時に、星が魚に変換するのと類似した事例はひろく世界各地でも報告されている(レヴィ=ストロース, 1976)。しかも、これはモンガラカワハギと南十字星との形態的な類似性だけでなく、空から海へ、海から空へという運動の類似性にも基づいている。

海面上に巨大なモンガラカワハギが浮かんでいるとして、島やサンゴ礁の空間的な配置をイメージする内容の知識は、自然そのもの(=島の配置)を別の自然物(=魚)のイメージを利用し

て再構成する思考様式にほかならない。このような内容の知識は、自然を別の自然物に投影する (projection of nature) ことであり、場所や空間をいかに認識するか (cognitive mapping) にかかわる。しかも、海上に浮かぶモンガラカワハギがしめす場所のなかには、実在する島やサンゴ礁とともに、あきらかに架空の存在もふくまれている。だからといって、この知識が役に立たない無用のものとするのではなく、実在と架空が一体となった世界が人びとの自然にたいする見方を構成するとみなすことが重要ではないかとおもう。架空の存在は、いってみれば文化的な操作を通じた自然認識のあり方にほかならない。海に浮かぶ島と海に泳ぐ魚の類似性の結びつけ、島の配置と魚の形態との隠喩的な結びつけ、架空の島やサンゴ礁の文化的な作出などは、自然の文化化が幾層にもわたる概念操作によってなされることをしめしている。したがって、自然の認識というさいに、自然を文化と対立するものとして分析する枠組はすくなくとも却下されなければならない。そのうえで、自然をいかに文化化し、文化がいかに自然化されるか (福井, 1996) という過程として自然認識の問題を把握すべきといえるのである。

### 引用文献

- 秋道智彌, 1980. “嵐の星”と自然認識—サタワル島における民族気象学的研究. *季刊人類学*11 (4): 3-51.
- , 1981a. “悪い魚”と“良い魚”—Satawal島における民族魚類学. *国立民族学博物館研究報告*6 (1): 66-133.
- , 1981b. Satawal島における伝統的航海術—その基本的知識の記述と分析. *国立民族学博物館研究報告*5 (3): 617-641.
- , 1981c. 魚・イメージ・空間—サタワル島民の航海術における位置認識のしかたについて. *季刊人類学*12 (2): 3-46.
- , 1984a. サタワル島における伝統的航海術の研究—島嶼間の方位関係と海域名称. *国立民族学博物館研究報告*9 (4): 651-709.
- , 1984b. 木の葉になった魚たち—サタワル島における魚の増殖儀礼. *季刊人類学*15 (4): 57-100.
- , 1986. サタワル島における伝統的航海術の研究—洋上における位置確認方法エタック (yeták) について. *国立民族学博物館研究報告*10 (4): 931-957.
- Akimichi, T. 1986. Conservation of the sea: Satawal, Micronesia. In: Anderson, A. J. (ed.), *Traditional fishing in the Pacific: Ethnographical and archaeological papers from the 15th Pacific Science Congress. Pacific Anthropological Records* 37: 15-33.
- , 1987. Triggerfish and the Southern Cross: Cultural associations of fish with stars in Micronesian navigational knowledge. *Man and Culture in Oceania* 3: 279-298.
- 秋道智彌, 1988a. 自然の文化表象. 伊藤幹治・米山俊直編, *文化人類学へのアプローチ*, 205-230. ミネルヴァ書房, 京都.
- , 1988b. 航海術と海の生物—ミクロネシアの航海術におけるPwukofの知識. *国立民族学博物館研究報告*13 (1): 127-173.
- , 1989a. ミクロネシアの笠漁—漁具・漁法の生態学的研究. *国立民族学博物館研究報告別冊*6: 269-298.
- , 1989b. サタワル島における食物カテゴリー. 松原正毅編著, *人類学とは何か—儀礼・象徴・歴史*, 199-232. 日本放送出版協会, 東京.

- , 1994. 漁撈活動と時間認識. 掛谷誠編著, 講座地球に生きる2. 環境の社会化—生存の自然認識, 45-66. 雄山閣, 東京.
- Akimichi, T. 1996. Images and reality at sea: fish and cognitive mapping in Carolinean navigational knowledge. In: Ellen, R. & Fukui, K. (eds.), *Redefining Nature: Ecology, Culture and Domestication*, 493-514. Berg, London.
- & Sabino Sauchomal, 1982. Satawalese fish names. *Micronesica* 18: 1-34.
- Alkire, W. H. 1970. Systems of measurement on Woleai Atoll. *Anthropos* 65: 1-73.
- 1978. *Coral Islanders*, 201 pp. AHM Publishing Corporation, Arlington Heights.
- Barrau, J. 1958. Subsistence agriculture in Melanesia. *Bulletin of Bernice P. Bishop Museum* no. 219. Bernice P. Bishop Museum.
- 1961. Subsistence agriculture in Polynesia and Micronesia. *Bulletin of Bernice P. Bishop Museum* no. 223. Bernice P. Bishop Museum.
- Bellwood, P. n. d. Dispersal of people in the Pacific: past, present and future. Paper presented at the International Ocean Symposium '98 on "The Ocean, Can She Save Us?" on the 29th July, 1998 at Tokyo Big Sight, Tokyo.
- Blust, R. 1988. The Austronesian homeland: A linguistic perspective. *Asian Perspective* 26 (1): 45-67.
- Ellen, R. 1996. Introduction. In: Ellen, R. & Fukui, K. (eds.), *Redefining Nature: Ecology, Culture and Domestication*, 1-36. Berg, London.
- Fosberg, F. R. 1969. Plants of Satawal Island, Caroline Islands. *Atoll Research Bulletin* no. 132. Smithsonian Institution, Washington D.C.
- Frake, C. O. 1969. Notes and queries in ethnography. In: Tylor, S. A. (ed.), *Cognitive Anthropology*, 123-137. Holt, Rinehart and Winston Inc., New York.
- 福井勝義 (編), 1994. 講座地球に生きる4 自然と人間の共生—遺伝と文化の共進化. 雄山閣出版, 東京.
- Gladwin, T. 1970. *East is a Big Bird: Navigation and Logic on Puluwat Atoll*, 241 pp., Harvard University Press, Cambridge.
- Goodenough, W. H. 1953. *Native Astronomy in the Central Carolines*. University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Headland, T. N. 1997. Revisionism in Ecological Anthropology. *Current Anthropology* 38 (4): 605-630.
- 今森光彦・阪本寧男・林良博・堀信行・福井勝義. 1998. 「フィールド・サイエンス」宣言. *エコソフィア* 1: 33-43.
- Ingold, T. 1996. Hunting and gathering as ways of perceiving the environment. In: Ellen, R. & Fukui, K. (eds.), *Redefining Nature: Ecology, Culture and Domestication*, 117-155. Berg, London.
- 石森秀三, 1985. 危機のコスモロジー. 福武書店, 東京.
- Irwin, G. 1992. *The Prehistoric Exploration and Colonisation of the Pacific*, 240 pp. Cambridge University Press, Cambridge.
- 1998. The colonisation of the Pacific plate: chronological, navigational and social issues. *The Journal of the Polynesian Society* 107(2): 111-143.
- 嘉田由紀子, 1995. 生活世界の環境学—琵琶湖からのメッセージ. 農山漁村文化協会, 東京.

- 
- 栗本英世. 1994. 降雨をめぐる政治と紛争. 掛谷誠編, 講座地球に生きる2. 環境の社会化—生存の自然認識, 195-212. 雄山閣出版, 東京.
- Lewis, D. 1975. *We, the Navigators: The Ancient Art of Landfinding in the Pacific*, 348 pp., The University Press of Hawaii, Honolulu.
- レヴィ=ストロース, C. 1976. 野生の思考 (大橋保夫訳). みすず書房, 東京.
- 松井健, 1997. 自然の文化人類学. 東京大学出版会, 東京.
- 松木哲, 1982. 私信.
- Riesenberg, S.H. 1976. The organization of navigational knowledge on Puluwat. In: Finney, B. (ed.), *Pacific Navigation and Voyaging*, 91-128. Polynesian Society Memoir no. 39, Wellington.
- Thomas, N. 1991. *Entangled Objects*, 259 pp. Harvard University Press, Cambridge.
- Turner, V. W. 1969. *The Ritual Process*, 213 pp. Aldine, Chicago.
- Tylor, S. A. 1969. *Cognitive Anthropology*, 521 pp. Holt, Rinehart and Winston Inc., New York.

Accepted October 15, 1998

---